

バレンタイン

小西美枝子

最近、街に買い物に出たらデパート内は真っ赤なハートで飾り付けられていた。すっかりバレンタイン商戦真っ只中だ。今となつてはあまり自分とは関係のない行事になつてしまつたけど、バレンタインデーは女の子にとってはとても大切な日だ。

私は高校二年生の時、ラグビー部の主将を務めている先輩に恋していた。話した事もないどころか、声さえも余り聞いたことがない。ただ、ラグビーに汗を流す姿がカッコよくて、眺めているだけで幸せだった。彼がグラウンドに行く時は、私が当時所属していた吹奏楽部の部室の前を必ず通る。通り過ぎるのは一瞬なのに、部室の窓から通り過ぎるのをずっと待っていた。授業の合間の休み時間には、彼は頻繁に友達とベランダに出ていたのでそれも毎時間眺めていた。わざわざ放送委員に所属し、アナ

ウンスする時は先輩が聞いていますように、と思いを込めてアナウンスした。なんともいじらしい気もするけど、よく考えると、ほとんどストーリーカーである。でも、当時の私は、ずっと見ていればもしかしたら私の気持ちに気づいてくれるかも、という甘い期待をもちつつ、見つめるだけで幸せな日を過ごしていた。

いままで思いも告げる事もできなかつたけれど、もうすぐバレンタインデーが近づいてくる。いよいよ告白の機会が巡ってきた。実は、密かに家で手編みのセーターを編んでいたが、雑誌などに「知らない子からもらおう手作りは気持ち悪いと思われるのでやめた方がよい」と書いてあったのでセーターは泣く泣く父親にあげる事にした。チョコはデパートで吟味し、当時の高校生にしてはちょっと奮発した千円くらいのチョコを買った。かわいらしい雑貨屋さんでカードを購入して手紙も書いた。

当日は、吹奏楽部の先輩に、通用口に呼び出してもらおうよう、手配もすんだ。

「よし！」あとは、当日頑張るだけだ。私は、数日後に迫る運命の日に胸を躍らせていた。国生さゆりの「バレンタインデーキス」の歌のように、キスなんてされちゃったらどうしよう、なんて考えていた。行動はおどおどしているのに、頭の中は過激である。

そして、バレンタインデー当日。朝から心臓は高鳴っていた。そして放課後、通用口にいくと、吹奏楽部の先輩が「もう来るよ！」と言ってくれた。あ、彼だ。緊張は一気に高まる。手のひらも汗でいっぱいだ。彼は、ラグビー部に所属しているだけあつて軽く一八〇センチを超える長身だ。そんな彼を見上げると今までに見た事がないくらいの至近距離に彼の顔が見えた。

「あ、あの、これ、もらってください。」

「ありがとう。」

たったこれだけだった。今思えば、なんかもうちょっと話をするとかすればいいのに、チヨコを手渡すだけで精いっぱいだったのである。

その後、一ヶ月後のホワイトデーを迎える前に、彼は卒業していった。もちろん、何の進展もないまま。

ちよっぴり切ない失恋の思い出だけでも、十年後の私にはとても大切な思い出である。仮にあの時運よく付き合ったとしても、お互いに何も知らないで付き合ったらほとんどの場合は別れてしまっただろう。そうしたら、このバレンタインの日の思い出は苦い思い出になってしまふ。負け惜しみではないけれど、片思いで終わった恋だからこそ、私にとって「若き日の甘酸っぱい素敵な思い出」なのだ。バレンタインまでの準備にワクワクし、ホワイトデーまでドキドキして待てるなんて、女の子はなんて得なんだろう！バレンタインは製菓業界

の陰謀かも知れないが、すばらしいイベントである。こんな素敵な思い出をくれたお菓子業界に感謝したいくらいだ。

「先輩、こんな感じでもいいですかねえ？」
あ、そうか。十数年後の私は、会社の同僚や後輩と一緒に、部署の男性陣に配るチョコを買いに来ているのであった。「このくらいの値段のチョコを買えば、来月のお返し期待できるかもね」などと打算的にチョコを購入していく。義理チョコこそ、まさに製菓業界の狙い通りなのかもしれないけど、チョコをあげることでおじさま方はちょっと喜んでくれるし、職場の雰囲気がちよつとでも和んだりするので、それはそれでいいと思うのだ。やっぱりバレンタインは素敵なイベントである。